

【7】 コミュニケーションに視点をあてた実践にみられた成果

研究の対象となった実践場面以外でも、コミュニケーションの力が高まり広がったという現れが生徒たちの姿にみられた。ここでは、児童生徒会活動と現場実習における生徒たちの姿を紹介したい。

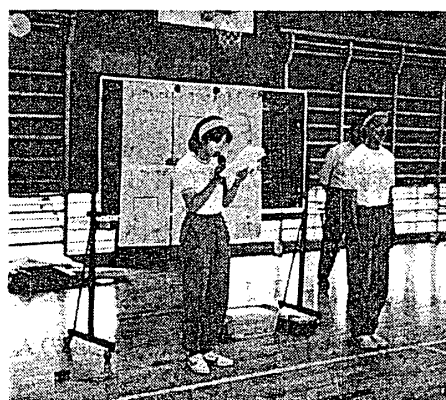
〈児童生徒会活動〉

H子は人前で話すことが苦手で、学校生活の中では自信を持って大きな声で発言したり、あいさつをすることがほとんどなかった。しかし、活動への意欲は旺盛で任されたことをやり遂げようとする責任感があり、友だちとの関わり合いを楽しむことができる力を持っている。比較的障害が軽く、身近なことなら自分で物事を考えることのできるH子に、コミュニケーションの力を高める働きかけの場として、児童生徒会活動は大変に有効であった。

生徒会長になったことで、全校の児童生徒の前であいさつをしたり、集会での司会・発表という機会が増え、回数を重ねるにつれて場慣れし、緊張した時でも臆せず大きな声が出るようになった。また、はじめのころは指導者の助けをかりてあいさつや発表の内容を考えたが、次第に何をどんなふうに言えばよいかのかが分かり、自分で考えて本番でうまく言えるように家庭で覚えるまで繰り返し練習してくるようになり、集会では自信を持って堂々と発言できるようになった。この自信が他の場面でも生かされ誰にでもすすんで大きな声で明るくあいさつをしたり、校外学習の場面では地域の方への牛乳パック回収の依頼を分かるようにはきはきと言うことができたりと、生き生きと他との関わりができる場面が増えた。学級→コース制の学習でのグループ→学部→学校→地域というふうにより、コミュニケーションの対象を広げていくことにより、机上学習では得られない実体験をもとに好ましい自己表現の方法を体得した事例だといえよう。

〈現場実習〉

学校での生活だけではなく、作業所・授産所・事業所等の現場で実習を行っている。限られた期間ではあるが、生徒たちにとっては社会の中に一人で投げ出される唯一の場であり、自分から他へ関わっていかねばならないことを身を持って経験する機会となる。いつでもそばに誰かがいて、聞かなくても教えてくれるということはほとんどない。分からないことがある時、まちがえてしまった時に自分で関わっていかねば仕事の流れが停滞したり、他に迷惑をかけるということが実際におきるので、「先生に叱られるから、先生がしなさいというから」と他律的ではなく、すすんで関わりを持つ必要性を実感できる。その場で自分はどう対処すべきか、自分で考えるという経験をし、1回ごとの実習で社会の風を受けた生徒たちは、少しずつ大人の顔をした青年へ変わっていくのである。



ふれあい集会の司会をするH子



実習先で報告をするF男